

# 认识我们的时代

## 中国的社会政治经济前景

北京天则经济研究所 茅于軾

於東京 2013年4月8日

# 中国人にとってのある夢

- 三十五年前文化大革命が終了時に、中国社会は極度な混乱状態にあり、食糧が足りず、食糧生産体制は崩壊寸前の状態にあり、社会も国家も希望を失った。
- そのとき、鄧小平は間違った路線を修正し、改革への道を切り開いた。そこから30余年に亘る高成長が始まった。
- 現在、中国は世界最貧国の一つから世界二番目の大国に成長した。
- 30年前、中国人が夢にも見なかったことは今、現実となった。

# 今は180年来の平和な時代

- もし1840年のアヘン戦争から数えれば、この30年間はそれ以来の平和で繁栄の時代である。

# これまでの173年の歴史を振り返る

- おおよそ6つの30年に分けることができる。
- 最初の30年は1840-1870。この間、第一次と二次アヘン戦争があった。咸豊皇帝が逃亡し、円明園が列強に焼かれた。そして、太平天国があった1851-1864。1億人近い犠牲者が
- 二番目の30年は1870-1900。中仏戦争、日清戦争、洋務運動があった。ここから中国人ははじめて西洋と向き合うようになった。義和団が八国連軍と対立し、西太后は西安に逃亡。
- 三番目の30年1900-1930。清王朝が終焉を迎え、孫文は中華民国を樹立。その後、軍閥が混戦し、私も生まれた。
- 四番目の30年は1930-1960。抗日戦争、国民党軍と共産党赤軍との内戦、朝鮮戦争があった。そして、3年間にわたる凶作により3600万人が餓死。
- 五番目の30年は1960-1990。文革という人災があった。改革・開放以降、天安門事件（89年6月4日）があった。
- 六番目の30年は1990から現在に至る。市場化の改革。

# 中国社会の進歩はすべて外国との交流によるもの

- 技術的には、あらゆる発明は西側諸国から受け入れたもの。
- 経済、社会と政治などの進歩も西側の影響があったからである。たとえば、銀行、裁判所、選挙、学校はいずれも。
- 20世紀初頭、ほとんどの西側の思想は日本を經由して中国に流れた。
- 孫文、蒋介石、魯迅、郭沫若、周恩来などいずれも日本に留学。
- 「経済」、「共和」、「共産党」、「幹部」は日本人が翻訳した言葉である。

# 抗日戦争と第二次世界大戦の終結

- 日本が引き起こした太平洋戦争は東アジアの人々に大きな損害を与えた。無論、その中には日本人も含まれている。
- 戦争を引き起こした者はすべての国の被害者に対して罪を犯したのである。
- 日本は戦敗国であるのに対して、アメリカは戦勝国である。しかし、アメリカは日本人を亡国の民として扱っていない。反対に、日米同盟を結成し、日本の再起を助けた。
- 中国は戦勝国だったが、戦後、5000万人もの人が戦争以外の原因により死亡。国力も極度に衰弱した。

# 朝鮮戦争は米中を敵対関係に変えた

- もともと戦争時、米中は同盟だった。ともに日本軍と戦った。朝鮮戦争をきっかけに、米中は敵対関係に変わった。
- そこから中国はグローバルのコミュニティになかなか再登場できなかった。
- 長い間、中国は独裁政権と付き合い、民主主義の政府と付き合わなかった。
- 未だに、中国国内では、人類普遍的な価値観について論争が行われている。
- 幸いにも、中国は今対外開放の道を歩み、グローバルコミュニティから離脱できない。

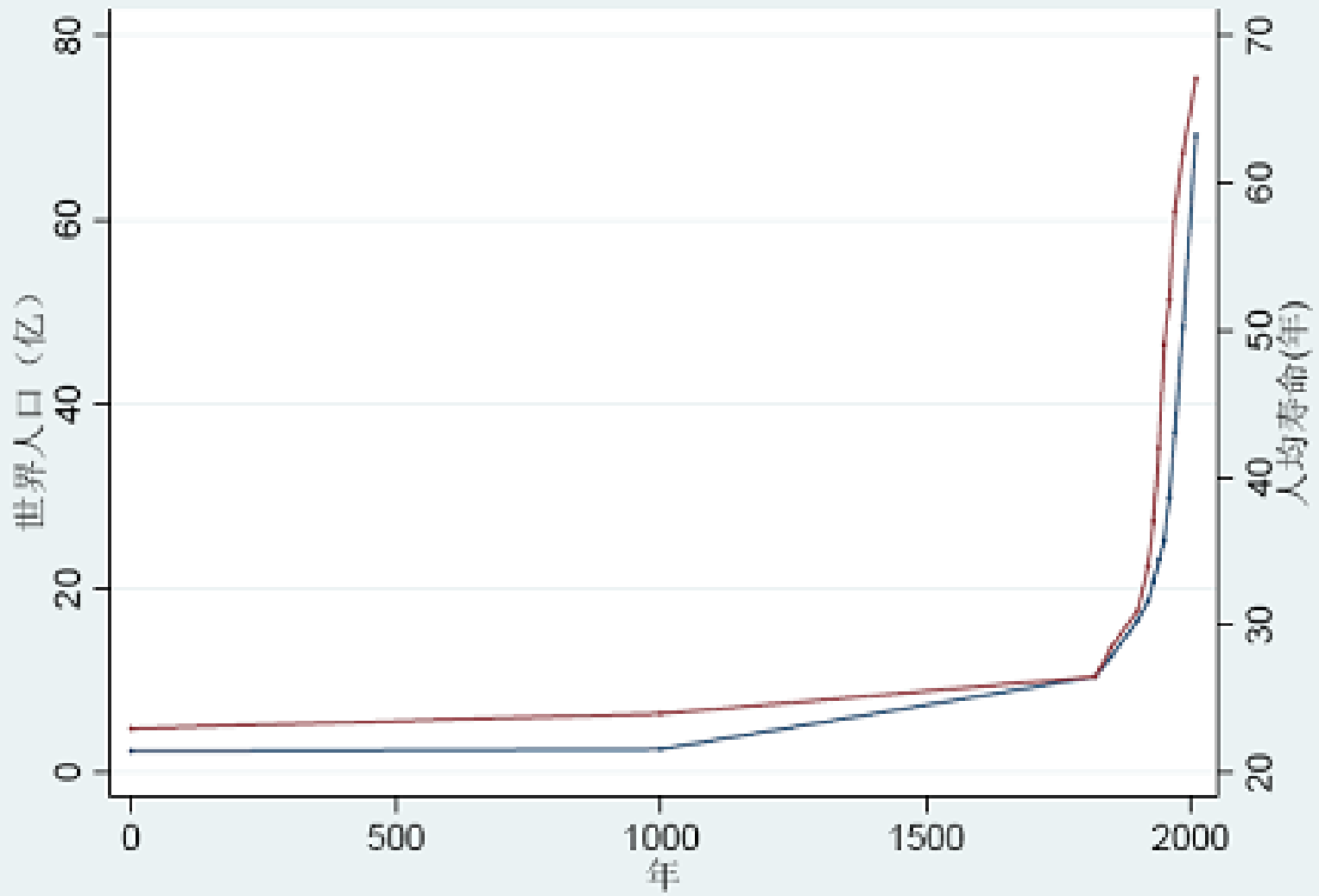
# 二種類の異なる国際関係

- 一つの国際関係はウィンウィンの関係であり、双方とも利益を得ることができる。
- もう一つの国際関係はゼロサムゲームであり、ウィンウィンにはならない。
- 国際貿易、投資と人材交流はいずれもウィンウィンになる。
- 国家の主権、領土問題と尊厳を強調しすぎると、なかなかウィンウィンにはならない。
- 後者（ゼロサム）について慎重に対処しなければならない。たとえば、釣魚島（尖閣諸島）の問題。
- 重要なのはゼロサムをウィンウィンの関係に変えていくこと。共同開発を通じてウィンウィンを達成できる。



# 市場経済制度は人類社会を変貌させた

- 18世紀末から世界的に人口が急速に増加し、寿命も長くなった。そのスピードは人類が進化した数万年の合計を上回る。
- 一つの可能性は市場経済の諸制度は人と人との関係を変え、互いに戦う関係から協力関係に変わったのかもしれない。
- 科学技術の進歩は人類の発展に大きく貢献。それには市場が大きく寄与した。
- 経済グローバル化は資源の争奪戦を抑制できた。
- 米、日、独と中国はいずれも石油の輸入国であるが、戦争はしていない。



— 世界人口 (亿)      — 人均寿命(年)

# 「温、良、恭、儉、讓」を国際関係に 取り入れる

- 「温、良、恭、儉、讓」は中国儒教の教えであり、日本でも広く知られている。
- この教えは中華民族の**5000年**の歴史と文化を醸成した。もし階級闘争ばかりやれば、中華民族はとっくに滅亡したのだろう。
- しかし、国際関係にはこのような教えはない。
- 西側諸国では、異なる思想をもって人々の調和を図ってきた。
- 国と国の関係では、この教えは語られない。
- たとえば、外交上、謝ることは考えられない。

# 国を本とするかそれとも民を本とするか

- 外交官は国を本とすることになっている。彼らは些細なこととも国家の一大事にしてしまう。
- たとえば、アメリカの看護婦はロシアの子供を養子縁組にし、子供が大きくなってからその子供をロシアに送り返した。二つの家庭の問題なのに、両国の外交官は両国の一大事にしてしまった。
- アメリカ兵は沖縄で日本人女性を暴行した。この刑事事件も両国の一大事に発展してしまった。
- 広東省でウイグルの青年は漢民族の女性を暴行した。これも漢族とウイグルの民族紛争に発展してしまった。
- 釣魚島（尖閣諸島）にはGDPも税収もなく、政治家は自らの利益のために作った争い。
- 実は、我々が毎日目にする新聞記事の多くはこの程度の話であり、庶民のわれわれと何の関係もない。
- 政治家と外交官はいずれも国を本としているが、民を本とする姿勢に変わらなければならない。
- 民間交流と友好関係を発展させるのは一番。

# 中国の新しい指導部が直面する問題

- 中国の行方について毛沢東路線に戻るか、それとも民主主義へと進むのか。
- 中国の民衆は将来について一致した見方を持っていない。
- 経済成長が続いているが、社会の対立は先鋭化している。
- 貧富の差は拡大し、環境破壊が深刻化しているとともに、幹部の腐敗が横行。信用が崩れ、嘘ついても恥を知らない。
- 経済も危機に直面している。不動産はバブル化。銀行には巨額の不良債権があり、**GDP**伸び率も低下している。

# 新しい指導部の対策

- まず、新指導部のチームを安定させ、現状認識を統一する。中国の指導部の形成は組閣するのではなく、元老による指名である。
- 胡錦濤政権のチームをみればわかるように、その内部の対立は激しい。改革は進まない。
- 新指導部が進めている改革は技術的なことであり、たとえば、公金を使った接待の禁止や会議のときにテーブルの上に花を置いてはいけないとか。指導者が外出するとき、交通規制を実施しないなどなど。中国にとって必要なのはより深層に及ぶ改革である。

# 中国経済が直面している変化

- 中国経済は静かに変化している。
- 人口構造は急速に高齢化している。小学生以下の人口は三分の一減少したのに対して、人口は**40%**増えた。
- 余剰労働力は急速に減少し、もうしばらくすれば労働力が不足するようになる。
- 都市部での出稼ぎ労働者はすでに新世代に変わった。かつて飢えを経験した農民でなくなった。彼らは教育を受けたことがあり、若いうえ、農業に従事したことはない。
- 改革当初と違って、現在、利益集団が新たに登場している。
- 一般の国民はより豊かになり、海外のこともよく知っている。
- 指導者はテクノクラートから社会人類学者に変わっている。
- 社会が多様化し、**NGP**も急速に台頭している。

# 中国経済に関する短期的予測

- 金融危機の影響があったが、中国経済はこれからも成長できる。ただし、スピードは遅くなるだろう。
- 経済構造は徐々に調整される。所得分配は徐々に中低所得層に傾斜する。国内消費は徐々に増加し、貿易黒字は減少するだろう。これからはサービス業は経済発展を支える柱となる。
- 経済成長には大きな潜在性が潜んでいる。それを邪魔しているのは独占である。金融を開放し、土地制度を改革しなければならない。同時に、国有企業も改革する必要がある。民営企業の割合を増やしていく必要がある。



# 中国の将来を占う

- 幸いにも、中国では大きな暴動が起きる危険性が低下している。なぜならば、民衆の知的能力は向上しているからである。教育の普及率が上がり、外国との交流も盛んになっている。
- 今の中国には腹いっぱい食べれない極貧人口がいなくなった。
- 中国では、軍隊や武装警察などが集中的に管理されている。
- 門戸開放は中国と世界とのギャップが縮小している。
- 国内には、民間と政府との明確な対立勢力は存在しない。

谢 谢